

三浦 恵¹: 報告—第27回日本植生史学会談話会—考古学の視点から—Megumi Miura¹: Report—The 27th forum of the Japanese Association of Historical Botany

第27回日本植生史学会談話会「漆にかぶれよう」が2008年8月2日～3日に岡山県高梁市と、新見市、真庭市で行われた。

日本列島では垣ノ島B遺跡(北海道函館市)の約9000年前の漆糸状製品を最古の例として、各時代、地域の遺跡から漆製品が出土している。最近では、遺跡から出土したウルシ材の種レベルでの同定が可能となり、塗料だけでなく木材の利用という側面からも注目されるようになってきている。私が研究対象としている神奈川県鎌倉市の中世遺跡からも漆器は大量に出土する。遺跡から出土した遺物を研究する際、その製作過程を知ることには大変重要であり、以前から木地の製作や塗料である漆に興味を持っていたことから今回の談話会に参加した。

岡山県中北部、広島県備後地区中北部で採れる漆を「備中漆」という。かつてはその透明度と伸びの良さが好まれ、多くの漆掻きが漆を掻いていた。同じく岡山県の北部、郷原という集落では「郷原漆器」という一般向けの漆器が中世の頃から作られていた。

近年では両者ともに衰微していたが、1990年代中頃から行政と企業の協力による「備中漆」、「郷原漆器」の復興運動が開始された。現在では植栽地のウルシは漆液を採取出来るほどに成長し、「郷原漆器」の技術の伝承も行われる様になっている。この復興運動に伴う漆の植栽地、漆器工房、漆掻きの作業などを岡山県郷土文化財団の高山隆之氏、社団法人林原共済会「漆の館」の小野忠司氏、漆芸家の山口松太氏に案内していただいた。

初日は朝9時にJR岡山駅に集合し、バスで高梁市備中町の漆植栽地へ向かった。この植栽地は、かつて丹下民雄氏という方が漆掻きを行っていた土地である。道中、高山氏と山口氏から「備中漆」と「郷原漆器」の復興に関するお話を伺った。

到着した植栽地は山の斜面で、様々な木々に混じってウルシがまばらに生えていた。ウルシが果樹園のように植えられている状態を想像していたため、これは意外な光景だった。ここでは漆掻き痕の残る木を見学した。木は樹齢30年ほどで、胸高直径は約30～40cmだった。数回にわたる掻き痕がついており、はしごをかけて数mの高さまで掻かれたものもあったが、漆液は樹体の下の方に溜るため、普通は高い位置では掻かないそうである。

続いて新見市にある林原共済会の植栽地とそこに併設された「漆の館」を訪れた。この植栽地は先程と異なり、果樹園の様に若い木が植えられていた。

この植栽地では岩手、会津など各地のウルシを栽培して

いる。木によって漆液の量や性質(乾燥のしやすさ、粘性など)が異なる。これが木の種類によるものなのか、土地に原因があるのかは未だはっきりしていないが、こうした性質を見極めた上で、消費者それぞれの要求に見合った漆を提供していくことが日本の漆生産が今後も続いていくために必要なのではないかと小野氏が語ってくれた。

ここでは小野氏による漆掻きを見学し、サヌカイト製の石器で漆を掻く実験を行った(図1)。今回の参加者には下宅部遺跡(東京都東村山市)の関係者が多く、同遺跡から出土した縄文時代のウルシの杭材を参考に実験をおこなった。下宅部遺跡のウルシ材には約15cm間隔でほぼ一周する掻き傷が残っていた。小野氏によると、傷の間隔を詰め過ぎると採れる量が少なくなってしまうため約15cmは適当な間隔だということだ。

また、一周する掻き傷を付けるには刃の回しやすい枝部が適している。この作業をするには枝を切り出した方が効率的の良いと考えられる。木を生きた状態で掻いた場合、掻き傷の周辺は盛り上がってくるそうだ。この盛り上がりの有無によって、当時のウルシ材の利用の在り方を検証することが出来る可能性がある。

このように実際に石器で漆掻きをしてみることで、多くの知見や発想が得られ、過去の人々の営みを復原するための新たな方法や課題が見えてきた(詳細は巻頭写真を参照)。

また、ここでは漆液を自身の腕に塗ってみて、かぶれるかどうかを試してみたり、漆液を舐めてみたりして、参加者が思い思いに漆と戯れた。漆はほのかに甘く、スイカに似た味がするとのことだ。ちなみにこのあたりでは漆の新芽を天ぷらにして食べるそうである。



図1 サヌカイト製の石器で漆を掻く実験。

その後、県北部の蒜山高原にある岡山理科大学蒜山学舎へ移動。勉強会では、(株)パレオ・ラボの佐々木由香氏から、下宅部遺跡におけるウルシの利用に関する研究、東北大学植物園の田中孝尚氏から、日本のウルシの起源をDNAから検証した研究の発表があった。考古学、植物学という異なった視点にたった漆の研究、そして漆と日々接している方々の視点が混じり、多くの知見が得られた。ジンギスカンと青マメ豆腐の夕食後、懇親会でも議論は夜遅くまで盛り上がった。

2日目は、朝9時に宿舎を出発し、真庭市蒜山の植栽地を見学した(図2)。この植栽地は山中を切り開いた漆畑になっており、木は前日に見学した「漆の館」のものよりも大きく太いものだった。ここで、正式な漆掻きを小野氏に実演していただいた。

漆掻きをする際には、まず掻く部分を藁で擦り、皮取り鎌で樹皮を剥ぐ「皮取り」という作業を行う。樹皮を剥ぎすぎると乾燥して漆の出が悪くなるためその日に掻く分だけ剥ぐのだそうだ。続いて「皮取り」した部分にカンナ(先端が鉤状になった専用の道具)で溝を切る。今回は最も一般的な方法である「送りカンナ」を見せていただいた。「送りカンナ」とは人差し指と親指を併用することで掻き溝を全体的に同じ深さで掻くことが出来る方法である。こうして出来た掻き溝に軽く筋を入れる。この作業を「アヤを切る」という。この作業によって漆液が出てくる。アヤは四番鎌(4本目の掻き溝)から徐々に切り始め、本格的にアヤを入れるのは六番鎌以降である。最初から漆を採ると、木の生育が止まり漆の出が悪くなってしまう。また、こうすることで木を前もって刺激し、漆の出を良くするという効果もあるそうだ。しばらくすると乳白色の液がにじみ出てくるので、これをヘラで集める(図3)。漆液は漆筒という容器に集められる。この日、漆筒は使わなかったが、前日に漆の



図2 蒜山高原のウルシ植栽地の説明をする小野氏(中央)。



図3 小野氏による漆掻きの実演。

館で実物を見せていただいた。集められた漆液はしばらくすると酸化して表面が真っ黒になってしまった。

ここでも前日と同様に石器による実験をおこなった。小野氏も石器の扱いに慣れてきたようで、石器は漆掻きに使いやすいと仰っていた。

続いて「郷原漆器」の工房である「郷原漆器の館」を見学した。普通、木地作りと塗りの作業は分業されているが、ここでは全ての工程を行っており、漆器が完成するまでの一連の流れを見学することが出来た(図4)。「郷原漆器」はクリを木地として使い、生木の状態で輪切りにしたものを年輪を中心に堅木取りで木地挽きすることを特徴としている。かつては下地には柿渋やヤマギリ炭の粉末を用い、木目が表面に出ないように塗りをしていたが、現在では生漆に砥の粉と地の粉を用い、木目を生かす拭漆(ふきうるし)という方法がとられている。また、下地に関しては蒜山で採れた珪藻土を用いる試みがされている。蒜山の珪藻土と「備中漆」という地元産の材料を使った「郷原漆器」を目指しているそうだ。個人的には漆を塗る刷毛が鎌倉の中世遺跡から出土するものと同じものであることが印象的だった。参加者は写真を撮ったり、制作者に質問をしたり、研究資料を提供していただいたりと、それぞれに有意義な時間を過ごした。また、参加者のうち3人の女性はロクロで挽いた木製のドングリ形携帯ストラップをいただいた。

最後に石器による漆掻きの実験が話題となった。今回の実験を通じて様々な可能性や課題が見えてきた。これらを踏まえて、来年も岡山で「漆」をテーマとした談話会を行う方向で話がまとまった。

考古学専攻者として、今回の談話会では漆器の木地作りから塗りまで、そして漆掻きを見学することが出来たことは大変勉強になった。そして、こうした日本の伝統的な産



図 4 「郷原漆器の館」の製作工房を見学する参加者。

業や技術の存続が危ぶまれる状況にある現在、岡山県における官と民が協力した文化保存の在り方は、久しぶりに聞いた明るい話題だった。また、ウルシというひとつの植物をめぐる、考古学、植物学、漆芸など異なる専門を持つ人々が集まったということは、今後の漆研究の多角的な可能性を物語っている。

今回の談話会は漆に魅せられた人々が心身ともに、心ゆくまで漆にかぶれた 2 日間だった。

最後に、お忙しい中案内してくださった高山氏、小野氏、山口氏、そしてこの談話会を企画してくださった世話人の能城修一氏、扇崎 由氏、守田益宗氏に深く感謝申し上げます。

(¹ 〒 162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1 早稲田大学考古学研究室)

田中孝尚¹：報告—第 27 回日本植生史学会談話会

Takahisa Tanaka¹: Report—The 27th forum of the Japanese Association of Historical Botany

第 27 回日本植生史学会談話会が 2008 年 8 月 2 日～3 日にわたり岡山県備中町、新見市、恵庭市で行われた。今回の談話会「漆にかぶれよう」に参加したのは、備中漆の里を訪れて、実際に漆液の採集を体験し、かぶれることをも含めてウルシへの理解を深めたいとの気持ちからである。談話会の参加人数は、一般参加者、世話人、案内人の合計 13 人であり、社団法人林原共済会「漆の館」指導員の小野忠司氏に備中漆の里を案内して頂き、備中を代表する郷原漆器の見学を行った。

備中は、古くからの漆液の生産地であったが、近年になり漆掻きが生業として成り立たなくなり伝統技術の継承が危ぶまれる状況であった。そこで、社団法人林原共済会と岡山県郷土文化財団が協力して「備中漆復活振興事業」を興し、ウルシの植栽と管理、そして漆掻き後継者の育成が行われている。郷原漆器(真庭市蒜山)は、明徳年間(1390～1394 年)頃よりはじまったが、戦後になり後継者不足から生産が途絶えていた。しかし、昭和 60 年から岡山県郷土文化財団によって郷原漆器の復活が行われ、現在では「郷原漆器の館」を中心に漆器製作と普及、後継者の育成が行われている。

8 月 2 日午前 8 時 50 分に岡山駅に集合し、最初の目的地である岡山県高梁市備中町西油野のウルシ植栽地に向かった。バスの中で世話人の能城修一氏(森林総合研究所)より談話会の概略について簡単な説明があり、備中町に着くまでの間、高山隆之氏(岡山県郷土文化財団)から郷原漆器の復興事業についてお話を伺った。目的地手前で小野氏と合流し、備中湖畔の道を通ってウルシ植栽地に向かった。湖畔には所々に放棄されたウルシの木が見えたが、民

家はほとんど見られなかった。ウルシ植栽地も湖畔の急斜面にあり、小野氏が師事され、長年漆掻きをされていた丹下民雄氏の自宅があった場所とのことであった(図 1)。現在は住む人もなく残されたウルシに時折漆掻きが行われて



図 1 丹下民雄氏のウルシ畑で説明する小野忠司氏。